

国語

注 意

1. 問題は全部で12ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答がイのとき)

1	<input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
---	--

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

— 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

現在の日本において、他者とか異文化といったものがどのように存在するのか。その難しさとは、文化産業に限って言えば、たぶんあらゆるものを貪欲に取り込んでいって全てを自文化のように作り替え流通させていくところにあるのかもしれない。

¹ 思想の世界が用意したポスト・モダン言説が、圧倒的なスピードでポピュラー音楽へと応用されていく過程で、ワールド・ミュージックやクラブ・ミュージックといった目新しい商品群、音楽ジャンルが登場した。引用・折衷理論は美術・建築にもましてポピュラー音楽のリミックスにおいて最大限に活用されることになったのだ。ヴィクトール・セガレンにならう^{*}、かたや空間的なエグゾティスム、かたや時間的なエグゾティスムが見事なまでに機能したといってもいいだろう。

いまや「日本のポップス」は、完全にあらゆる「他者を取り込んだかのように見える。様々な時代・スタイルのロック、ジャズ、ソウル、ラップ、ラテン……。あらゆるスタイルの「ポップス」の音像が、英語・日本語、時にはスペイン語の歌詞で「国産」化されている。こうした日本の音楽産業の制作—流通—販促システムは、マーケティング（市場動向を分析したうえで）の販売促進活動／タイアップ（他業種との提携）重視による効率最優先の短期的なマーケティング（商品化計画）戦略、坪面積の広い店舗の出店ラッシュなどにより、小売りの破綻を招いている。

ここでは、かつてセガレンがフランス文学史においてみたのと同じような構造を、日本の現代の音楽産業においてもみることができ。巧みに外部、他者を取り込みつつ、それを「日本」の、「フランス」の、と固定化することによって「他者」との出会いを回避させていく図式であり、それが生んだ閉塞状況である。現代日本においては、あらゆるものが手に入るが、なにもとも出会うことが出来ない。

資本主義の歴史は市場拡大の歴史であるとすれば、文化産業の大きな武器のひとつがエグゾティスムである。アメリカのポップスを「先進国」のイメージとして売りつけ、「後進国」の音楽を「自然」のイメージとしてパッケージ化する。望郷と憧憬をセットにした「異国趣味」は、あらゆる土地をあらゆる土地にむけて市場化する。だから、文化産業の手強さは、文化の破壊だけにある

のではない。徹底的に A。徹底的に B。このふたつは交換可能であり、差異が豊かなほど交換の組み合わせの確率と可能性は高くなる。音楽産業の戦略は、あらゆるものが聴取され消費される前提を用意し、グローバリゼーションはそれを現実化した。とはいえ、そこには何らかのバイアスが働いている。

マグレブ(北アフリカ)系アラブ歌謡から発展したポピュラー・ミュージックであるライは、モロッコ、アルジェリア、フランスを中心に広く親しまれてきた。このライが、アメリカに紹介された際のパブリシティ(世評)における「北アフリカのパンク」といった、ある意味では真実味もあるが、ユーロセントリック(欧米中心主義的)なモデルを用いてのプレゼンテーション(商品説明)により、アルジェリアの闘いが、ティーンエイジャーの性的自由の要請といったかつてのアメリカの若者と同じ闘いをたたかっているとのみ思わせてしまったという指摘がある。

⁴ 安易なアナロジ(類比、類推)は音楽ジャーナリズムにおいて非常に頻繁に用いられる。それも「知られていない音楽」を紹介する場合には、最も有効な手段だとすら思われている。音楽ジャーナリズムは産業と不可分であるばかりか、音楽産業全体の販促の一部となっているため、販売に有効な言葉・言説が用いられやすいということもある。多くの場合、間口を広げる意味でこうしたアナロジは積極的に用いられているが、ライの場合に限らず、様々な誤解を生んでいることは否定しようのないことだ。しかし、ここで重要なことは、こうしたアナロジと音楽の脱文脈化による導入が、先に述べた取り込みにも有利な点である。様々な面倒な文脈を排除し「音楽そのもの」にしたうえでアナロジによる説明を行えば、本来の場所とは全く異なる環境にも移植可能となる。またそのアナロジは、ユーロセントリックなモデル——ロック、クラシック、ジャズとの対比から自由になることが出来ない。

こうしてみると、産業的な「ワールド・ミュージック」言説が、対象となる地域を同じくするサイドのオリエンタリズム批判や文学・思想におけるポスト・コロニアリズム批評と切り結んでいけなかったのは当然であったと考えるべきだろう。「誰が、誰に向かつて、何を、どのように」語るか、を問題とするこうした思想と、その発生において産業的なものであり、脱文脈化により「音楽そのもの」の導入を図る「ワールド・ミュージック」の言説には大きな差異がある。しかし、「音楽そのもの」という問題

のたてかた自体が、音楽においては問題となつてくるということも考慮にいれないといけないだろう。ひとつは、先のライに関する議論でみたように脱文脈化により音楽の意味自体が変わつてしまう点、もうひとつはどこまで音楽そのものの強度と出会
いうるかという点においてだ。

前者においては解釈の意味付けが変わつてしまつただけではなく、ひとはたぶん音像自体をアナロジーで聴いてしまつたろう。パンクのような意味付けを持つライですらなく、パンクのような音としてのライ。それはもうライではない。

音楽に国境はない、と楽観的に語られるのは、歌詞があつたとしてもその歌詞が理解できなくても、情動に訴えかけられる面がある⁵とされているからだ。しかし、同時に音楽ほど明快にナショナル・アイデンティティ(国民性)、エスニシティ(民族性)、ジェンダー(文化的性差)、クラス(階級)の象徴となつてしまつたものもまたない。それでも、音楽は平気で越境し、意味を変え、かたちを変え、交配する。だから、やつかいなのだ。ひとは、パンクを知らなくても、マグレブの文脈を知らなくても、ライなるジャンル用語すら知らなくても、何だかわからないその音楽に「感動」しうるわけだから。そこを語ろうとする瞬間こそが、セガレンがひとつの「他者論として読みうるエグゾティスムを神学でも倫理学でもなく美学とした意味が現代に届く時となる。

セガレンの「ラディカルなエグゾティスム」⁶とは、他者に対して抱く絶対的な差異の「味わい」である。時間・歴史、空間・領土・国境、領域・分野・ジャンル……、そういった分割されたものたちのあいだにアナロジーではない斜線や補助線を引いていくこと。ひとつひとつのものと驚きを持つて出会い、また出会いなおしていくこと。「歌/声」が生まれてきた場所——文脈へとそれ自体を執拗に突き戻していきながら、それでもまたその場所を越えてくる瞬間に立ち会うこと。その時、たぶんラディカルなエグゾティスムは、生々しい美学として「他者」を感受する力を私たちに与えてくれるだろう。

(東琢磨『違和感受装置』による)

(注)

* ワールド・ミュージック——特定の音楽ジャンルの呼び名ではなく、ラテンアメリカ、アジア、アフリカなど、さまざまな地域の音楽を総称する語。グローバル化の進展とともに注目されるようになった。

* クラブ・ミュージック——八〇年代後半、ナイトクラブのダンス文化を母胎として流行した音楽の総称。複数の既成曲を巧みにつなぎ合わせて「リミックス」するスタイルを普及させた。

* ヴィクトール・セガレン——フランスの作家。一八七八〜一九一九。軍医として南太平洋や中国など世界各地を回った。

* エグゾティスム——フランス語で異国趣味。

* アルジェリアの闘い——フランス植民地だったアルジェリアは、長期にわたる植民地独立闘争を闘い一九六二年に独立を勝ち取るが、その後も国内政治が安定せず、内戦に苦しんだ。

* サイド——パレスチナ出身のアメリカの批評家。「西洋」が、自分たち自身の内なる要素として認めたくないさまざまなマイナスイメージを他者としての「東洋」に押しつけてきた歴史を「オリエンタリズム」と呼んで批判した。

* ポスト・コロニアリズム批評——帝国主義、植民地主義に関わる文化や歴史の様々な問題を、支配側、被支配側の相互にわたって研究する批評の立場。

問一 二重傍線部 a「食欲」、b「執拗」の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「思想の世界が用意したポスト・モダン言説」は、どのように言い換えることができるか。最適なものを次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア グローバル化とともに新しく現れた多種多様な音楽ジャンル

イ 全ての作品を既にある作品の引用・折衷として捉えなおす考え方

ウ ポピュラー音楽を中心に影響を広げたりミックスの実践

エ コラーージュを始め、オリジナリティ信仰を否定した近代以降の美術理論

オ 近代建築の合理性からすれば「無駄」に見える装飾を導入した建築論

問三 傍線部2「現代日本においては、あらゆるものが手に入るが、なにものとも会おうことが出来ない」とはどういうことか。最適なものを次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

- ア 貿易大国日本では、多種多様な音楽が紹介されているように見えるが、実は一部の有名な作品しか入ってこない。
- イ 明治以来の文化輸入の「伝統」がある日本だが、今では外国の音楽の変化を追うことに疲れてしまっている。
- ウ 特色ある音楽が紹介されても、「内向き」になりがちで日本文化は他文化との出会いに積極的ではない。
- エ 日本文化は自らにとって異質であり続ける他者の文化を、最終的には排除してしまう。

オ 日本の文化環境にあつては、すべてが既知のものに作り替えられ、驚きをもって他文化と会おうことができない。

問四 傍線部3「パッケージ化」は、ここではどんな意味か。最適なものを次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

- ア 特定の音楽を商品化するにあつて一定の解釈やイメージを付け加え、分かりやすい商品にすること
- イ ひとつの商品を前面に出して広告しながら、それにまとめて同種の複数の商品を売り出す販売戦略
- ウ コンサートに行ったりレコードを買ったりという手間を省いて、音楽鑑賞のあり方を軽量化すること
- エ 今まで知られていなかった文化を日本文化の型に適合させたいうえで商品化すること

問五

オ CDのジャケットや本の装幀など商品の外観に、内容にかける以上の費用を投下する販売戦略

ア 再生すること——増殖させること

- イ 創造すること——盗用すること
- ウ 保存すること——開発すること
- エ 思い入れること——作り替えること
- オ しばり取ること——おだて上げること

問六 傍線部4「安易なアナロジー」には、どういう問題があると考えられるか。文章の全体を読んだ上で最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 文化を売るための商品としてしか扱わない音楽産業は、安易なキャッチコピーを濫用することによって他者の音楽に備わっている気品を損なってしまう。

イ 新たに紹介すべき音楽を、それを生みだした背景から切りはなして欧米音楽にたとえることは、既知のモデルの枠内にその音楽を拘束してしまう。

ウ 新しい音楽を紹介する際、聴取者がよく知っている音楽にたとえる説明は、結果的に聴取者の音楽センスを劣化させ、音楽産業の衰退をまねくことになる。

エ 非欧米の音楽を欧米に発する音楽ジャンルにたとえる説明は、その音楽の価値を高める反面で、無意識のうちになされる人種差別でもある。

オ 音楽が国民性や民族性と分かちがたいものである以上、一定以上の音楽的センスをもった聴取者であれば安易な広告のなかにひそんだ虚偽を見破ってしまう。

問七 傍線部5「音楽そのものの強度」とはどういうことか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア クラシック音楽にはない衝撃力をもって聴取者に訴えてくる現代的音楽ジャンルの力

イ 現代の音楽が意識するとしなやかにかかわらず引き継いでいる文化的伝統の深い奥行き

ウ ある音楽を生んだ土地の風景や、そこに息づいている自然のおりなすリズムの魅力

エ ある音楽がそれを生んだ歴史や社会の文脈を超えて聴取者の情動に訴えてくる力

オ 世界の聴取者に受け入れられ、長く聴き継がれる音楽の中に普遍性を感じとる能力

問八 傍線部「ラディカルなエグゼクティヴ」の説明として最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

- ア 敬意をもって異国の文化に出会い、その優れた面を積極的に紹介する努力
- イ 異質な文化に対する違和感を克服し、自文化との接点を探し出す努力
- ウ 他文化を尊重するために、それが生まれた歴史や社会を深く学ぶ姿勢
- エ 自分と同じではない他者との生々しい出会いに、限らない喜びを感じる感性
- オ 文化の産業化を単純に否定するのではなく、異文化を進んで受け入れる感性

二次の文章を読んで、後の間に答えよ。

民族の大義や、大東亜の解放や、神州不滅といった戦時中のまじない言葉（「イデオロギー」を、¹社会的な動物である男たちは信じた。いや信じようとした。しかし、²より自然的な存在である女たちはそうではなかった。すくなくとも、戦後になって、男たちはそのことに気づくのである。

土岐善麿は、昭和二十一年の『夏草』にうたっている。

あなたは勝つものと思つてゐましたかと

老いたる妻のさびしげにいふ

だが、戦時中、男たちはその女の自然の声にほとんど気づかなかつた。気づいても、まだ十分に言葉にあらわすことができなかつた。わずかに太宰治や坂口安吾のみが「死の哲学」に抗する言葉を、小説中の主人公の生きかた、あるいはその言葉として描きえただけだつた。

たとえば、吉川英治の『宮本武蔵』（昭和十一年）は、軍国日本にとつてのヒーロー像を提出していた。そこでは、宮本武蔵は野性の剣士から、剣と心とをみがくことによつて、「大君」の国家を担うべく「求道」という国民道德の道を歩きつづけるのである。暴れものの武蔵を千年杉につるした沢庵和尚は、武蔵にこう教えさす。「それだけの力を、国家のためとまではいわん、せめて、他人のためにそそいでみい、天地はおろか、³神もうごく。——い³わんや人をや」と。

これが、生きて虜囚の辱めを受けず、民族の悠久の大義のために死ね、という時代のヒーロー像に要請されていた国民道德であつた。そして、大衆作家・吉川英治はみごとにその時代の要請に応えた。

ところが、坂口安吾が描いた武蔵像は、こういつた「求道」という国民道德の道を歩もうとするヒーロー像をくつがえすもの

だった。安吾の武蔵像は、「A」悟道に達した武蔵とは対極にあるもので、二刀流や長い權さえ使い、どんな術策を弄しても生き残ろう、勝とうとするのである。

昭和十七年に発表された「青春論」に、安吾はこう書いていた。

万全の計算をつくし、一生の修業を賭けた上で、なお計算や修業をはみだしてしまふ必死の術策だから美しい。彼（武蔵）はどうしても死にたくなかった。是が非でも生きたかった。その執着の一念が悪相の限りを凝らして彼の剣に凝っており、縫り得るあらゆる物に縫りついて血路をひらこうとしているだけだ。最後の場にのぞんだ時に、意識してこの術策を弄してしまふ武蔵であつた。救われたい未練千萬な性格を、逆に武器に駆り立てて利用している武蔵であつた。

安吾の武蔵は「求道」の道を歩むどころか、「未練千万」である。しかし、だからといって、安吾は武蔵を非難しているわけではない。それどころか、「是が非でも生きようとするために、あらゆる術策を弄する武蔵を、かれは「必死の術策だから美しい」というのである。

そうだとすれば、この安吾の武蔵像は、戦後の「墮落論」（昭和二十一年）におけるかれのメッセージ、生きよ、墮ちよ、に一直線に繋がっている。安吾にとっては、人間が必死に生きてゆくこと、生きてゆくために「必要なものこそが美しい」と考えられたのである。

ブルーノ・タウトは『日本文化私観』（昭和十七年）において、日本の文化や伝統美を桂離宮などの型に見出し、そのことによつて当時の日本主義や伝統主義のイデオロギーにカタンした。^aこれに対して、坂口安吾はタウトの著と同名のエッセイ「日本文化私観」（昭和十七年）において、その日本主義や伝統主義のイデオロギーをあざやかに批判した。その批判の拠つて立つ思想は、人間が必死に生きてゆくこと、そして生きてゆくために「必要なものこそが美しい、というものだった。

見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ。美しさのための美しさは素直でなく、結局、ほんとうのものではないのである。要するに、空虚なのだ。そうして、空虚なものは、その真実のものによつて人を打つことは決してなく、詮ずるところ、あつてもなくても構わない代物^bである。法隆寺も平等院も焼けてしまつていつこうに困らぬ。必要ならば、法隆寺をとり壊して停車場をつくるがいい、我が民族の光輝ある文化や伝統は、そのことによつて決して亡びはしないのである。

安吾はここで「我が民族の光輝ある文化や伝統それじたいを否定しているわけではない。そうではなく、それを法隆寺や平等院などの文化的遺物、あるいは万葉集などの古典に求めるのではなく、民族の必死に生きるかたちのほうに求めている。

B とは、ついに民族の生きてゆくかたちである、とでもいつたらよいだろうか。

それゆえ、戦争に負けようが、東京が焼野原になろうが、坂口安吾はすこしも悲観しないのである。「墮落論」にあるように、戦後軍人が闇屋になろうが、「軍神」の妻であつた未亡人が新しい恋人をもとうが、その生きてゆく必死さゆえに美しい。そういう⁵戦後の精神は、すでに安吾が戦時中に提起していたわけである。

(松本健一『日本の失敗』による)

(注) * 死の哲学…第二次大戦中の、国のために死ぬことが最上の価値であるという考え方。 * 桂離宮…京都にある江戸時代初めに建てられた皇族の別荘。数寄屋造りの書院と回遊式庭園で知られる。 * 闇屋…とくに戦後の闇取引を行う人。

問一 傍線部1「社会的な動物」と傍線部2「より自然的な存在」とは、この文章ではどのような意味か。最適な組み合わせを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 社会で働くことが当然である存在——自然との共生を追い求める存在

イ 建前や主義主張を重視する存在——世情に関わりなく現実を見抜く存在

ウ 現実よりも理想を大切にしている存在——将来よりも現在を大切にしている存在

エ 常に競争原理で物事を考える存在——世の中の大きな流れを重視する存在

オ 組織や地位を不可欠とする存在——家族や地域などとの関係が強い存在

問二 傍線部3「いわんや人をや」とは、どういう意味か。次のア～オから最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア ましてや、人を支配できないことがあるか。

イ ましてや、人の犠牲になれないことがあるか。

ウ ましてや、人が心を動かさないことがあるか。

エ ましてや、人のために尽くせないことがあるか。

オ ましてや、人として立派になれないことがあるか。

問三 Aに入る表現として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 勝負は時の運という

イ どんな相手にも勝てる

ウ 正々堂々とした勝負をする

エ 仏教の教えに帰依して

オ いつ殺されてもいい

問四 傍線部4「生きよ、随ちよ、」と対照的な内容を表す三十字以内の箇所を抜き出し、最初の五文字で示せ(句読点を含む)。

問五 二重傍線部a「カタン」を漢字に、二重傍線部b「代物」をひらがなにせよ。

問六 Bに入るもつともふさわしい語を次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 文化

イ 歴史

ウ 社会

エ 眞実

オ 美

問七 傍線部5「戦後の精神」とは、この文章ではどのようなものか。次のア〜オから最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア 時代の流れにうまく乗りながら、新しさを貪欲に追い求めてゆく精神。

イ 敗戦によつて日本人としての誇りや恥の気持ちを失つた嘆かわしい精神。

ウ ほかの人は違つた人生を歩むことによつて、個性の尊重を主張する精神。

エ 生きてゆくために必要なことは、必死で何でもする、という自分に正直な精神。

オ 社会への反抗を自己の拠点として、あえて人から非難されるような生き方を選ぶ精神。

